

琵琶湖におけるピーク時と現在との外来魚駆除の比較

山本充孝（滋賀県水産試験場）

1. はじめに

琵琶湖における外来魚駆除事業は、1985年度から国や県の補助を受けて滋賀県漁業協同組合連合会が主体となって進めている。2002年度には外来魚の捕獲駆除と繁殖抑制を強化して駆除事業全体を大幅に見直した。また、2003年度からは「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例(琵琶湖ルール)」の施行とともに、琵琶湖環境部が回収ボックス、回収イケスを県内各所に設置し、再放流(リリース)を禁止することで一般の方にも駆除に協力していただいで進めている。これらの当時の駆除事業の状況を第二回「外来魚情報交換会」(2007年1月)で演者が水産課の担当として紹介した。今回は、当時の外来魚駆除と近年(2021年)の状況を比較して紹介する。

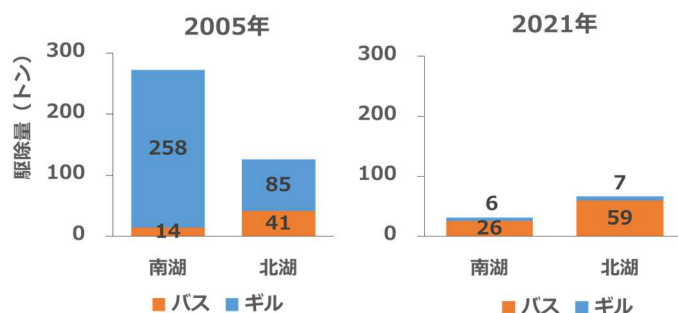
2. 内容

滋賀県漁業協同組合連合会による外来魚駆除事業では2006年頃には毎年400トン以上の捕獲量であったが、現在は100トン前後まで減少している。

2005~2006年当時は、駆除される外来魚の大半が生息量の約8割を占めていたブルーギルで、エリ・外来魚エリ・刺網等において主に琵琶湖南湖で捕獲されていた。しかし、現在の外来魚生息量はオオクチバスとブルーギルがおよそ半々と推定しており、魚食性がより強く漁業被害が大きいバスを主体に、主に刺網・沖曳網・投網・エレクトリックショッカー等によって琵琶湖全体で行われるように変化している。

これらの駆除を長年に亘って継続的に続けてきた結果、外来魚の推定生息量は当時は約2,000トン前後であったものが、現在は400トン程度まで減少してきている。

バス・ギルの駆除量の変化



駆除量に占めるバス・ギル比率

